

シリーズ街並み再見9

太陽の熱い視線を感じながら、上中地区を歩き歩いて…。

◆ 少年時代を思い出させる雨粒と蓮畑

香芝市の東隣、上牧町に接する上中地区。「上中」という名は、明治二十年、上里・中筋という二村を合併した際、それぞれの村名の頭の文字をとったことに由来します。八月中旬、志都美駅を始点に上中地区を歩いてみました。

昼下がりのため利用客は少なく、志都美駅やその周辺も穏やかなた

たすまいを見せています。線路沿いに北へ。まず、すぐ東は上牧町という場所に位置する法覚院を目指します。

県道上中下田線を上ると、自動車が入スピードを上げて走ってきては、瞬く間に通り過ぎていきます。一台、そしてまた一台と…。そんな光景を繰り返し見るたびに、上中地区の活気が伝わってくるようでした。

国道168号に入って、三角橋を渡ると道は次第に細くなり、なだらかな上りに。やがて蓮畑が見えてきます。遅咲きのようで、花はまだつぼみ。そのとき雨粒が額にボツリと落ちてきました。ついさっきまでお日さまが照りつけていたのに。不思議に思いつて見上げれば、空にはいつの間にかとどころごろ灰色の雨雲が浮かんでいます。通り雨でしょうか。「ひと雨、来るかな」と心配になったとたん少年時代の思い出が蘇ります。蓮の葉を傘代わりに遊んだなあ…。

蓮畑からは傾斜がきつくなってきました。どれくらい歩いたでしょう。か。やっと法覚院に到着。ほつとひ

と思いついたのか、急に蝉時雨のBGMのポリウムが上がった気がしました。



石造りのお不動さん

◆ お不動さんからの
思わぬ清涼剤

法覚院の本尊は、釈迦如来坐像です。節分には大護摩が焚かれる星祭りが行われ、遠く東京・神奈川・北海道からの参詣者があるそうです。入口に近づくと、犬が思いっきり

ほえ始めました。「不法侵入者じゃないぞ」と言ったところで、わかつてもらえそつにないと思いながら歩を進めると、階段が待っていました。「また上りか」とため息一つ。ふと右に目をやると、こんな教えが掲げられていました。へ本願の心を憶念し 日々精進すべし。これに励まされ、さあ、行くぞ。階段を一つ、二つと数えて、十九数えると踊り場に。そこを右に行くと、すつくと立つ不動明王に出会いました。なぜか親しみを感じてしまふような顔です。石造りのお不動さんは右手に剣を持ち、剣先は顔の横に届いています。その剣と顔の間からは勢よく一筋の水が流れ、とつておきの清涼剤。お父さんとお母さんに連れられた一歳ぐらいの女の子が水遊びを楽しんでいました。お父さんに抱っこされ、満足そうな笑みを見せています。

ここから階段を上ると、右手に梵鐘堂、左手には釈迦如来像、さらに上ると左手に観音像があります。大空を背景に堂々とした姿。思わず足を止めて見入ってしまいました。



法覚院付近の蓮畑

◆気の向くままに歩いて、 かわいい公園を発見

もと来た道を帰り、駅を過ぎて細い道を南に行くと、右手にあるのは正願寺、大神宮。

県道上中下田線を下り、少し歩くと、大きな石が目に入ってきました。焦げ茶色の板壁で住まいの歴史を語るような堂々とした屋敷の脇にいくつもの大石、それよりも少し小振りの石が並んでいます。石の囲いの中には植物が植えられており、道ばたに彩りを添えています。ちよつと他では見られない、心安らぐ街角の風景です。



二つのかわいいオブジェ

地域住民の連携が密で、子どもたちを地域で大切に育てようとする風土があるのか、へごどもー〇番の旗のかかる家を何軒か見つけました。

ステキな街角探しの偶然的発見を期待して路地に入ると、小規模の畑が広がっていました。生命を育てる太陽と土のパワーには感服。そこで背を伸ばす生命の威力にも同じく感服。故郷をシンボリックに語る景色の一つでしょう。

さらに行くと、まだいかにも固そうな緑色の実をつけた柿の木がありました。柿の木に見送られると、「おや、かわいいー」。ミニ公園です。入口を入ったすぐのところに、電話の受話器の形をした赤色と青色の二つのオブジェ(?)があります。いや、これはオブジェではなく、きつと椅子でしょう。小さな子どもが腰を掛けられそうですから。この二つの椅子は、入口の左右にあり、まるで「おいで、おいで」と人を招き入れているようです。

色鮮やかな遊具も目を引きます。鉄棒、シーソー、ブランコ、滑り台、ジャングルジム、うんてい。子どもたちのはしゃぐ姿が目につくほどくるよつですが、あいにく子どもたちが遊ぶ様子は見られませんでした。きつと暑さを避けて日中は家で過ごしているのでしょう。もう数時間もすれば、子どもたちがやってくるかもしれない、と思いつながら公園をあとにします。

◆穏やかな風景に 溶け込む子どもたち

県道上中下田線にでると、西方に香芝健民テニスコートが見えます。炎天下にもかかわらず、数人の年配の方がテニスを楽しんでいました。思わぬ方向に高く打ち上げられた球。打ち返そうと全力疾走したものの、途中で足がもつれてしまったプレーヤー。これは残念!とは言え、しよつちゅう歓声が上がると、とにかく楽しそうです。テニスコートの手前には大きな



存在感たっぷりの大きささまざまな石

畑が広がっています。いたいた、女の子が二人。夏休みの街角には、やはり子どもの存在がほしいものです。仲良しの二人が畑の奥に歩いていき、背の高い草に消えていったかと思えば、また姿を現します。心和ませる夏のワンシーン。ゆつくりと過ぎる時間を感じながら、終点となる駅へ。

駅の客足は出発時とはすつかり変わっていました。それもそのはず。まだ日は明るいとは言え、時刻は夕方を差していました。